

微笑ほほえむ似え非せ紳士しんしと純情娘じゅんじょうむすめ

## 目次

第一章	降りかかる災難	5
第二章	波乱の出張	49
第三章	目的達成!?	148
第四章	初デート?	213

## 第一章 降りかかる災難

### 〈厄日〉

一ノ瀬麗、二十五歳。

二日連続の完徹からさらに続けて仕事をこなし、ようやく家に帰るお許しがもらえたのは、夕方のこと。

ちょうどラッシュ時だったので電車はぎゅうぎゅう詰めだけど、何とか奇跡的に席を確保できた。しかも安心してもたれかかれる一番端っこ。神様は頑張った私にごほうびをくれたのね！ なんて、ほんの些細なラッキーに感謝した。

外は寒いけど、電車内は暖房が効いている上にこの人口密度。ちょっと暑苦しいくらいだ。身体が暖まってきたところで、急に眠気に襲われる。しかも同時にお腹が空いてきた。

そういえば、まだ晩御飯食べていないな……食欲よりも疲れが強くなって、さっきまで空腹なんて感じるゆとりもなかった。

寝過ぐすのが怖いから、頑張つて起きていようと努力していたはずなのに——気づけば、すこし眠っていたらしい。その眠りから私を現実呼び戻したのは、マナーの悪い乗客の音漏れでも、おぼさんたちの大きな喋り声でもなかった。

がさごそと僅かに聞こえてくる音。

怪訝に思い、うつすらと重い瞼を開けた。意識が途切れる前と変わらない満員電車の中で、目の前にはつり革を持ちながら反対の手でスマートフォンを弄る若い女性が立っている。

アップした髪、首には温かそうな灰色のマフラーが巻かれていた。カジュアルなカーキ色のジャケットを羽織った大学生くらいのその彼女は、耳にイヤホンをはめ、目を小さな画面に集中させている。それは、電車や街中でよく見る光景だ。肩にかけられた大きなトートバッグはファスナーを閉め忘れたのか、中身が丸見えだった。

さっきの音は、彼女がバッグの中から何かを取り出した音だったのかな。

そう思ったとき——

警戒心をどこかに置き忘れた彼女の斜め後ろから手が伸びてくる。鞆にそつと差し込まれたその手がお財布を抜き取った瞬間、ぼやけていた私の焦点がそこにピタリと合った。

まさにスリの犯行現場を目撃したのだ。犯人は、街中でよく見かけるような五十代くらいのおばさんだった。どこにでもいる、まさに普通のおばさん。

目の前の女子大生風の女の子は、スられたことにまったく気づいていない。

緩やかに電車の速度が落ちる。まもなく次の駅に到着する、というタイミングで、おばさんは何

食わぬ顔で扉の方へ移動しはじめた。——彼女のお財布をポケットにしまって。

「ま……待って！」

一部始終を目撃した私は、反射的に立ち上がった。突然の私の行動に、スマートフォンに集中していた目の前の彼女が軽く目を瞠る。私に気づいたおばさんは、人込みの間をぬってさらに扉へ進んでいく。このまま逃げるつもりなのだろう。

「ま、待ちなさい！」

何事かと周りにいる乗客が怪訝な顔で私を窺うなか、私は焦って彼女に声をかけた。

「お財布！ お財布確認して！」

「え？」

よく聞こえなかったのか、イヤホンを外して問い返される。私は、彼女が肩からさげているトートバッグを指差した。

「だから、お財布！ 今あの人盗ったの、私見なんです。早く確認して！」

「え、スリ!?」

目を大きく見開いて、彼女は鞆をがばつと開けた。彼女が一言「ない！」と叫ぶと、一気に車内がどよめく。その様子を目の端でとらえながら、私は犯人を追う。

まったく、何で今が冬なんだ！

コートを着て厚着しているだけでも動きにくいのに、さらにこの人口密度だ。むわっとした空気に軽く酔いそうになる。

眠気と疲労でふらつきながら、「すみません」と声をかけてサラリーマン風のおじさんたちの間をすり抜ける。時折こちらを振り返るおばさんの顔は、明らかに焦っていた。

「誰か、あの人止めてください！」

「あの人」だけじゃ弱いかな？

私はおばさんの特徴をできるだけ思い出して、大声で叫んだ。

「黒のダウンジャケットに、赤いタートルネックのセーターを着た、五十代前後のおばさん！ 誰か早く捕まえて！」

私の声を聞いた人たちは顔を見合わせる。困惑、好奇、警戒、疑惑の聲が、車内に波紋のように広がっていく。

「スリ？ え、マジで？」

「ちよっと、誰だよー！」

「おばさんって言うてなかった？」

「盗まれたなんて気のせいじゃないの？」

「嫌だ、早く捕まえて通報しないと」

「ってか本当に見たの？」

ざわめきが広がる中、動く人はごく僅か。トラブルに巻き込まれたくないのはわかる。でも犯罪は見逃せないじゃない。

電車が駅にすべりこんだところで、私はようやくおばさんに追いついた。サラリーマン風の男性

たちに腕を取られている。

おばさんの服装は地味で、近所のスーパーにでも行くぐらいのラフさだ。ふくよかな身体つきに、丸みのある顔で、人がよさそうに見える。だから余計にぞっとした。彼女の顔には罪悪感のかけらも見えなかったのだ。

「お財布、返してあげてください」

「ふん、隙だらけで突っ立っているからいけないのよ。あれじゃ盗ってくれて言うてるようなもんじゃない！」

逆切れしたおばさんが、恐ろしい形相で私に突っかかってきた。あくまでも悪いのは無防備に鞆の中身を見せていた女の子の方だと、言い張る。そんなの無茶苦茶だ。

ようやく後ろから被害者の女の子が近付いてきた。おばさんのポケットからはみ出しているブランド物のお財布を目にし、「あー！ 私の!!」と声をあげる。実際に財布を見るまで、本当にこの人に盗られたのか、半信半疑だったのかもしれない。

電車がゆっくりと止まった。扉が開き、たくさんの人がホームに降りていく。私は逃げられないように、おばさんのジャケットの裾を握り締め一緒に降りるように促した。

するとおばさんは何故か、おとなしく私に従う。とりあえず駅員さんに事情を説明して対応してもらおう。スられた女の子も、もちろん一緒に降りる。

その間もおばさんは抵抗しない。だから油断したのかもしれない。ほんのちよっとだけジャケットの裾を掴んでいる手の力を抜いた瞬間、物凄い力で突き飛ばされた。

「え、え!?」

ドスン、と思いつき尻餅をつく。って、かなり痛いんだけど……!!  
か弱い女の子を突き飛ばすか!? ひどい、ひどすぎる。今日は何の厄日なんだ!  
涙目で痛みを堪えている中、おばさんは、全速力でホームを走って逃げて行く。

「ちよ、大丈夫!?」

女の子が慌てて駆け寄ってきた。

「私はいいから、あっち追って! 逃げられちゃう!!」

私はおばさんを指さしながら叫ぶ。

それでも迷っている彼女に、「早く!」とさらに大きな声で言った。

すると彼女はヒールの高いブーツを履いているとは思えない速さで、おばさんを追って走り出した。——おお! 実は体育会系だったのか!

やがて彼女が犯人に追いついたのを確認した途端、安堵のため息がこぼれて、全身から力が抜けていくのを感じた。

「あ……まずい……!」

立ち上がろうとして、貧血のような眩暈に襲われる。そういえば徹夜明けだし、夕飯もまだだっただ……

残り少ない貴重なエネルギーを使い切ってしまった——なんてことを思ったところで、フツと意識が遠のいた。

倒れそうになった身体を誰かが駆け寄って支えてくれる気配を感じる。  
そして私は、完全に意識を手放したのだった……



「う〜ん……!」

ごろりと寝返りをうちたいのに、身体が動かない。何か重たいものが腰に巻きついていて、息苦しい。

まだ全然寝足りないのに……と、不満を抱きつつ、私はゆっくりと目を開けた。  
そしてすぐに閉じる。

今、今! ありえないものを見ましたよ!? 目を開けたら間近に超絶美貌の持ち主が……! —

いや、いくら何でも美男子がこんなところにいるわけないし。それにそんな知り合い、私にはいないし。

これは夢だな、と結論付けて、再びゆっくり目を開く。

(ひっ……!?)

思わず悲鳴をあげそうになった。

やっぱり夢じゃないみたいなんですけどー!?

驚きすぎて心臓が痛い。落ち着け、落ち着くのよ、麗!

見覚えのない部屋と、落ち着いたシックな調度品が視界に入る。『大人の男性の部屋』という表現がピッタリの、余計なものが一切ないシンプルな部屋。

どうやら私は、その部屋の中央に置いてある恐ろしく寝心地がいいクイーンサイズのベッドの上にいるようだ。そして、同じく恐ろしく整った顔をしている二十代後半と思いき男性の腕の中に、ガツチリと捕らわれている。

黒くて長い睫毛まつげに高い鼻梁びりょう、少し薄めの唇とサラサラな黒髪。精神せいしんさよりも美しさが勝る容姿の持ち主は、規則正しい寝息を立て続けている。パジャマの襟えりから覗く首筋と鎖骨さごうのラインがまたセクシー……って！ そんな観察よりも自分のことだよ！！

起きたら見知らぬ男性の腕の中って、一体何のドッキリですかああー！？

ほんと、眠気なんてぶつとんだよ！ 身体に疲労は残っているけど、今は状況分析の方が大切だ。まずは頑張ってこの状況から抜けようとしたら、意外にもあっさり腕が外れた。その人を起こさないようにベッドから降りる。お尻に痛みを感じて、内心首をかしげながら記憶を巻き戻す。

確か、スリのおばさんに突き飛ばされて、思いつきお尻を打ったんだ。その時の服装は、膝丈スカートに黒のタイツ、シフォン素材のシャツにコートという、今時Oしさん風だったはず。

そこまで思い出し、私はがばつと自分の格好を見下ろして—— 呆然とした。

—— 何故今の私は、少し大きめのワイシャツ一枚しか着ていないのでしょうか？

しかも恐ろしいことに、ブラをつけていない。

って、最後の若とろは!?

シャツの裾すそを捲めくってチェックし、パンツはすっかり身につけていたことに安堵あんどした。そりゃもう、めっちゃくちゃ安堵した。

「うう……ん」

掠さられた低い声が聞こえてきて思わず飛び上がりそうになる。ベッドの上の男性が、身じろぎしたのだ。

慌あわてて近くに置かれていた自分の服を手に取り、大急ぎで着替えて部屋を脱け出す。広いリビングを通して玄関まで超特急。とにかく急いそごう。この部屋の主が起きる前にここから逃げるんだ！ 早く脱出しなければ！

普通なら彼に事情を聞くのだろうけど、そんな余裕はなかった。自慢じゃないけど、私は彼氏いない歴〃年齢を更新中。そんな乙女に、この状態でパニックになるという方が無茶だ。

玄関先にたどり着いたところで、ふいに寝室の方から物音が聞こえた。その音に驚いて慌あわてふためた私は、ちゃんと靴を履くこともできずに、マンションから脱兎だつとのごとく逃亡したのだ。ぼつさばさの髪の毛と崩れたメイクのまま朝の通勤電車に乗り込んだ時は、周りがちゃんとした格好をしていることもあって、本当に恥はずかしかった。

何とか自宅にたどり着くと、すぐにシャワーを浴びて、とりあえず寝て忘れてしまえ！ と思うことにした。

そして一体何の偶然なのか——

あの部屋の主が私の勤め先を訪ねて来たのは、それからたった二日後のことだった。

「麗く、お前、この前の社員カードまだ返してないぞー」

衝撃の朝帰りの日から三日目の朝。

二日お休みをもらって、出社した事務所はいつも通りの光景だった。くわえタバコに黒いシャツを着た全身真っ黒コーデの室長が、長い脚を組みながら一人用のソファにふんぞり返っている。

古紫鷹臣、三十二歳。探偵事務所兼何でも屋「オフィスTK」の若き室長だ。実は私の母方の従兄なんだけどもね。名前のごとく鷹を思わせる彼の目は鋭くて、睨まれると結構怖い。とはいえ、一八五センチ近い長身にワイルド系で整った容姿をしているから、黙っていてもゴージャスな美女が寄ってくる。口は悪いし人使い荒いし俺様だけど、本質は結構面倒見のいいお兄ちゃんだ。

「忘れてた！ 今返すね」

ジャケットを脱いで慌ててバッグをあさった。お気に入りのトートバッグから取り出したのは、とある会社の社員証だ。そこには私の顔写真が貼ってある。それを「はい」と、鷹臣君に手渡した。

「ご苦労さん。一応片付いたんだろ？」

彼はふらふらとカードを振りながらたずねてくる。

「うん、もう報告書はメールで送ったはずだけど、届いていない？」

自分の紅茶を淹れるついでに鷹臣君にも淹れてあげる。朝はやっぱりブラックティーで目覚めすっきりだよな。

「ああ、ちゃんと届いている。俺から依頼主に昨日渡しておいた。あとは向こうの結果待ちだよ。くやったな」

紅茶を飲みながら、グシャグシャと鷹臣君は私の頭を撫でた。少し色素の薄い私の髪が鷹臣君の指に絡まる。まるで小さな子供にするように頭を撫でるのは鷹臣君の癖だ。もう子供じゃないんだけど、と微妙な気持ちになるが、褒められるのは素直に嬉しい。髪が乱れても、特にセットとかしていないから、いくらでもボサボサにしてくれて構わないし。

誤解のないように言っておきたい。確かに女子力は低いけど、最低限の身だしなみは私だってちゃんとしますよ？ ただ髪の毛はブラシで梳かす必要がなくなってしまうのでさらさらなので手櫛で十分OK。他の家族は真っ黒なのに、何故か私だけ瞳も髪もナチュラルな茶色だ。栗色の髪は背中の中あたりまで伸ばしている。

若干ネコ目気味の目にはウオータープルーフの Mascara を上睫毛だけにつけて、薄い場所に眉毛を描いて、ファンデでそばかすを隠したら完成！ の簡単手抜きメイクが普段の私だ。化粧栄えするののかしつかりメイクをすれば印象が変わるらしいが、そんなに毎日頑張っていられない。だから毎朝のメイク時間って多分十分かからないんじゃないかな。でも、これでいいのか、二十五歳！と思わなくもない今日この頃だったりする。

この事務所で、今働いているのはパートを含めた十名。室長の鷹臣君と私を除く八名は、皆何か

しらすごい特技を持っている。爆弾に詳しい人や射撃の名人、ハッキングのプロから、情報収集に長けた人、はたまた外国の軍に属していた人まで。ホントどこからスカウトしてきたの？ 鷹臣君かちやり、と部屋の扉が開く音が聞こえた。

「あらあゝ！ 久しぶりじゃない、市川玲さん？」

現れたのは三歳年上の先輩、一色鏡花さん。一七〇センチの長身でスレンダーな、モデル並の体型のお姉さんだ。上品な明るいブラウンの髪を緩く巻いて、きりつとした眉毛とふつくら瑞々しい唇、そして口元のほくろが何とも言えない大人の色気を醸し出している。その色気、少しでいいから分けてくれませんかね。

「鏡花さん……その名前はもう捨てましたってば！」

からかいを含んだ声音で偽名を呼ばれて、私は少々呆れ気味にため息をついた。

先ほど鷹臣君に手渡した社員証。あれに書いてあるのは私の本名である一ノ瀬麗ではなくて、市川玲という別人の名前だ。

実はここ二ヶ月ほど、私はとある会社の上層部に頼まれて、その会社に派遣社員として雇われていた。表向きは、年末に向けて忙しい間だけ雇った短期派遣社員。でも真の姿は、女性社員にセクハラをしているという噂のある部長を調べる調査員。その噂の確認及び証拠集めのために、普段はやらないOL風の格好をして会社勤めをしていたのだ。

普通の派遣として入ったものだから、事務仕事もたんまり押し付けられた。本来の仕事も同時にこなしした結果、最終日には二日も徹夜をする羽目に。

ちなみにターゲットであったその部長、実はセクハラ以外でもいろんな悪事を社内で行っていた。で、ついでにそれらも報告したら、たいそう喜んでいただけたみたい。

慣れないOLの事務仕事は、本来の仕事よりも気を遣って疲れるものだった。

偽名を使って入っているから、他の社員と深くかわからないように、目立たないように、まるで空気のように振舞った。毎日黒髪ボブのウィッグを被り黒ぶちの伊達眼鏡をかけて、メイクも地味で色味の薄いものに。でも悪目立ちしない程度にしつかりと化粧をして。毎朝別人になりきるのに、結構な労力を使った。

簡単な特殊メイクやヘアメイクは私の特技だけど、やっぱりそれはたま〜にやるから楽しいんであって、時間のない朝に、しかも毎日やるとなるとかなり疲れる。

それをする必要がなくなっただけでも、あの仕事が終わってよかったと思う。

あの会社内では、突然現れて、そして挨拶もなしに辞めていった謎の人物として名が残るかもしれない。でも、人の噂も七十五日って言うし。市川玲のこともじき皆の記憶から消えるだろう。私も、演じていた彼女を自分の中から消して、本来の一ノ瀬麗によく戻れたのだ。

「あゝ疲れたー。鷹臣君、今日の予定は何ー？」

出社早々に疲れた発言をした私を呆れたように見ながら、鷹臣君は鏡花さんに尋ねた。

「一色、今日他のやつらはどうした？」

鏡花さんは後ろのホワイトボードを見てから、鷹臣君と私に向きなあった。

「白石君と黒崎君は多分事務所には戻ってこないわね。今日も張り込みだから。百瀬さんは浮気調

査で証拠集め。青葉さんは臨時SPで護衛中、木崎さんと赤坂さんは警察から回ってきた案件で追われているわ。最後に瑠璃ちゃんは今日は風邪でお休み、っ」と

おお、見事に皆さん忙しそうだ。うちは外回りが多い仕事だから、全員が揃うことはなかなかない。まあ仕事があつて多忙なのはいいことだよな。

ここで働き始めて四年目の私は一番下っ端だ。一番若い瑠璃ちゃんも高校生の時からここでバイトをしていたため、私より一年先輩なのだ。

「ずつつと紅茶を啜っていたら、鏡花さんが今日の予定を告げた。

「室長。本日十時に来客がありますので、乱れた髪はちゃんとセットしておいてくださいね」

「これは寝癖じゃねーよ」

ぼさぼさとした黒髪を手櫛でざつと後ろに梳かしながら、鷹臣君がぶすつとした顔で反論する。ちよつと天然パーマが入っているから、どうしても寝癖っぽく見えるんだよね。

「そろそろ十時だな。おい麗。茶の用意をしておいてくれ。一色は来客を応接室まで通すように」はーい、と返事をして私は紅茶やコーヒー、それにお菓子が置いてある給湯室へと入った。

鼻歌を歌いながらお茶請けの用意をしていると、事務所にチャイムが鳴り響いた。

出迎えた鏡花さんの声の他に、耳に心地いい、低く柔らかな美声が届く。そのあまりに優美で上品な声に、思わず好奇心がむくむくと頭をもたげる。

一体、どんな人が来たんだろう！

お茶を持っていく前にちよつとだけ盗み見しちゃってもいいよね？

ちらり、とドアの隙間から覗いた瞬間。私は咄嗟に口元を手で覆い、悲鳴をこらえた。今、お茶を持ってなくて本当によかった!! 持ってたら確実に落としていたよ。

だって隙間から見えた人物は、あの二日前の朝、目覚めた私を抱きしめていた麗しの超絶美形だったんだから――



鷹臣君が応接室で彼と向き合っている気配が、扉の外にも伝わってくる。早くお茶の用意をしなきゃいけないけど、無理! このままあの人の前に出て、何くわぬ顔でお茶出しするなんて、私は絶対にむーりー!!!

ふと妙案を思いついた私は、お茶の準備もそこそこに事務室へ戻り、ロッカーの私物をあさる。何か、何かこういう時に使えるものがあつたはず……!!

手に取つたのは今風なちよつとギャルっぽい茶色のウィッグ。長さは胸元ぐらいで、巻き髪風だ。急いでそれを被り、目元がつつり付け睫毛をつける。そして伊達眼鏡をかけて、服装は……もうこのままでいいや! 今着ているのは、シンプルな白のニットにショートパンツ、黒のタイツに黒のロングブーツだ。首元が少し寂しい気もするけど、あいにくネックレスはつけていない。このギャル風メイクでアクセサリーの一つもつけていないのは少し違和感があるかもしれないけど、ええーい! もうめんどくさいー!

この間、たったの五分。

お茶出しが遅れちゃったけど、五分くらいおおめに見てよね、鷹臣君!!  
メイクが終わったと同時に、後ろから鏡花さんが声をかけてきた。

「麗々? お茶はまだかつて室長が言ってたけど……って、あんた何やってるの?」  
不思議そうな顔で首を傾げる鏡花さんに、私は思わず飛びついた。

「鏡花さん! お願います、私の代わりにお茶出してきてください!!」  
いくら変装したからって、このまま平静を装ってお茶なんて出せるか!

この格好なら気づかれることはないと思うけど、だからといって絶対大丈夫という保証はどこにもない。

私の尋常じゃない勢いに、鏡花さんは不審そうにしている。

「何かわからないけど、室長はあんたに頼んだのよ。一度引き受けたのなら、どんなことでもやり通しなさい」

うう、そんなごもつともなお姉さん意見、今は聞きたくない。

「何がそんなに嫌なのか、事情は後でゆっくり聞くとして。今はお客様をこれ以上待たせるわけにはいかないでしょ。依頼人はそこら辺ではお目にかかれないうらいのいい男よ? 長身で穏やかな微笑みを絶やさないう美男子って感じで。まあ、私の好みではないけれど」

中身はひと癖ありそうだしね、と続いた鏡花さんの吹きは、小さすぎて私には届かなかった。

私はのろのろと鏡花さんから距離をとり、彼女に全身を見せた。

「これ、私ってわかりませんかよ? まるで別人のギャル風女子ですよね?」

「何、あんた知り合いな? いつの間に。まあ、その格好なら麗とはわからないから安心して大丈夫よ。いつもながら、そのメイク技術には感心するわね。短時間でそこまで……普段からちゃんとすればいいのに」

「普段からここまでする気になれませんよ! たまにするから楽しいんであって」

「はいはい。じゃ、事情は後で聞かせてもらうから。楽しみにしてるわ」

優しいんだか、厳しいんだか……

結局私は鏡花さんに、部屋を追い出されてしまったのだった。

三回ノックして扉を開け、お辞儀をしてから入室する。

「失礼します」

応接室は明るい白を基調としたインテリアで、いつも花を飾って殺風景にならないように気を配っている。部屋の中央には、向かい合わせでゆったりと腰掛けられるソファと、少し低めのガラスのコーヒーターブルが置かれていた。

私は超絶美形と極力目を合わせないように、俯き加減でテーブルまで近づく。痛いくらいに鼓動をうつ心臓の音が聞こえないことを願いながら、無表情でお茶を出した。

隣で鷹臣君が一瞬目を瞠ったけど気づかないふりをする。どーせ急にこんな格好で出てきたことに対して、「そのせいで遅れたのかこの野郎!」とか思ってるんでしょ。

後でたっぷりお説教聞くから、今はとりあえず見逃してください！

「お茶をお出しするのが遅くなり、申し訳ありません」

鷹臣君が一言添えると、目の前の人物がくすりと笑う気配を感じた。

「いえ、どうぞお構いなく。わざわざありがとうございます」

……何だかこつちを向いて言っているような気がする。本当にえらい美声だ。柔らかさを感じられる中低音で、さらに微かに艶っぽい色気も混じっている。男性で色っぽいって……ていうか声だけでこの感想って！

ダメだ。直視したら、絶対にメデューサに睨まれるくらいの威力がある！

でもお礼を言われて返事をしないわけにはいかない。さつき鏡花さんにも大丈夫と太鼓判を押してもらったことだと、私は意を決して顔を上げた。何とか頑張って満面の笑みを浮かべる。

そしてアイドル声の瑠璃ちゃんを意識する。ちよつと軽いノリで語尾は長め。きゃぴきゃぴ感を出すのも忘れちゃいけない。少し声のトーンも上げてつと。

「い〜え〜。遅くなっちゃってすみません〜。それでは、どうぞごゆっくり〜」

それだけ言って、私はそそくさと退室しようとした。

が、隣から手首をがしつと掴まれる。

「麗。お前も同席しろ」

え!? ちよつと鷹臣君。一体私に何の恨みがあるのさ!

あくまで表情に出さないように気をつけながら、思いつきり眼鏡の奥から睨みつけた。□元は根

性で笑みを作っているけど。

「室長、私もですか? でも、お邪魔じゃありません?」

さつさと退室させてえ!

鷹臣君の向かいに座る人物は、にっこりと微笑んだまま、こつちのやり取りをじつと眺めている。

うう、変な汗が……

けれど無情にも、鷹臣君は退室を許してくれなかった。

「ご依頼の件、彼女に担当させたいと思うのですが、よろしいでしょうか?」

へ? な、なんだって? 今、何て言いやがりましたか!?

後で絶対に締めてやる……!

そう固く心に誓っていると、柔らかく微笑む美形が告げた。

「もちろん構いません。どうぞよろしくお願い致します」

彼が頭を下げると、さらりと癖のない黒髪が流れる。

は、ははは。そこまでされたらもう席に座るしかないじゃないか……

気合で無理やり笑顔を作ってお辞儀した後、私は鷹臣君の隣にゆっくりと腰掛けた。



「それでは、詳しい内容をお聞かせ願えますか」

その美形が私に名刺をくれた後、鷹臣君が話の続きを促した。

今の私は、もちろん名刺なんて持っていないけども。だってお茶出しに来ただけだし。ちょっとふてくされながら、ともかく依頼内容の把握に集中することにした。

目の前に座る微笑み紳士は、東条白夜、三十歳。東条グループ会長のご子息で、二年前、とある子会社の社長に就任したという。

東条グループといえば、ITからエレクトロニクス、医療機器にホテルなど幅広い業種に携わる、世界でも屈指の企業集団だ。

寝顔でも整った顔立ちだと思っただけで、起きている彼はさらに美しかった。黄金比率の持ち主なのか、完璧なまでの左右対称の顔。自然なカーブを描く太すぎない眉。甘くなりすぎないすっとしたきれいな二重瞼には鋭さもなく、穏やかな性格が窺える。染みやほくろのまったくない肌には、少したけ薄めの唇。程よく彫りの深い顔立ちには、スーツはもちろんだけど和装も似合いそうだ。微笑みからは凛々しさよりも柔らかさが感じられ、彼自身から受ける印象は、とても優しい。

——何だかものすつごく嫌な予感がある。

「実は、ある女性を捜して頂きたいのです」

「ほう、人捜しですか。どのような方ですか？」

嫌な汗が背中を流れ落ちていく。私はとにかく笑顔を張りつけたまま黙っていた。

そんな私の様子を気にすることもなく、東条さんは鞆から布の袋を取り出した。そして、その中

から一つの靴を出し、私たちに見えるように自分の膝の上においた。

あ、あれは！

「島乃商事にお勤めの、市川玲さん、という名の女性なのですが」

私の呼吸が一瞬止まった。

つてことはこの人、私を捜してるの!? ぎゃあああー! なんてー!?

内心大混乱の私の隣で、ぴくり、と鷹臣君が微かに反応する気配を感じた。横目でちらりと私に視線を送ってきたが、その瞳は思いつき「お前一体何へマしやがった」と語っている。

「失礼ですが、勤め先と名前をご存知なら私たちは必要ないのでは？」

ナイス、鷹臣君！

そうだそうだ、ここは自分で何とかしてくれ。

まあ、そんな人物はもとから存在しないから、捜しようがないんだけど。

すると、東条さんは少し困った表情をした。

「ええ、そのつもりだったのですが、島乃商事に問い合わせたところ、彼女はすでに退職していたのです。それに住所や個人情報は一切開示できないと言われてしまいました、こちらにご相談に参りました」

ええ、そうでしょうとも。そこらへんは島乃商事の上層部がちゃんと対応しますよ。個人情報をきちんと消去する手続きを、もちろん私も確認済み。

ふ、と息を吐きたいのを堪えて、私は目の前にある靴に視線を向けた。

東条さんの手元に、有名ブランドの黒のパンプスが片方だけある。それはまさしく、あの朝慌てすぎて履き損ねた私の靴だった。確か右足を履いた瞬間に物音がして、一目散に逃げ出しちゃったんだ。

結局駅前で一足千円のサンダルを買って、片方だけになってしまったパンプスを持ち帰ったのだ。家に帰ってどれだけ落ち込んだことか！ だってあの靴は、射撃の研修のために無理やりニューヨークに連れて行かれた時、空いた時間で唯一買ったお気に入りの一足だったのだから。しかも私のサイズはあれがラストで、あまりの運のよさに感激して、速攻で買ったんだっけ。

あの左足の靴が、目の前に、手を伸ばせば届くところにあるのに……!!

その視線に気づいたのか、東条さんが靴を持ち上げて穏やかに説明を始めた。

「彼女がこの靴を置いて帰られたので、どうにかして直接お渡ししたいのですが……あいにく私には人捜しをする時間的余裕がありません。どうか手を貸して頂けないでしょうか」

差し出された靴を鷹臣君が受け取る。

「靴を片方だけ忘れるとは、まるでシンデレラみたいな話ですね」

「ええ、そうですね」

苦笑いしつつのほのぼの談話なんてマジでいいから！ さっさとその靴よこせえ!!

靴のサイズに視線を落とした鷹臣君が呟いた。

「アメリカサイズですか。サイズが五とは……ずいぶん小柄な女性なのでしょうか」

日本でいうと、二十二センチくらいだ。私は身長は一五八センチで平均値だけど、足は小さい。

このサイズにめぐり合うのってかなり大変なんだから！

「ええ、そうですね。身長は……そう、ちょうど一ノ瀬さんくらいでしょうか」

ぶふっ!!

今、紅茶飲んでたら確実に嘔き出していた。

「え、えーそんなんですかあ〜？ あ、室長〜私もその靴、拝見してもいいですかあ〜？」

瑠璃ちゃん言葉、続行中。

この口調、一体いつまで続ければいいんだろう。ちよつとしんどくなってきた。

鷹臣君から渡された靴は、やっぱり私のものだった。

ああ、少し傷が……！ ホームで突き飛ばされた時についたのかも。三日前はこんななかったのにつ。

心の中で泣く泣く別れを告げて、一日靴を東条さんにお返しした。

その後鷹臣君は、いろいろと必要な話を聞いた。そして最後に連絡先をもらい、東条さんにはひととつてもらった。靴は重要な参考品ってことで、今はうちの事務所の一時預かりになっている。

ひとまず嵐が去ったことに安堵して汗を拭いていたら、後ろから凄まじい圧力が……!!

「う〜ら〜ら〜？」

ひいっ！

一難去ってまた一難……!!

「何をやってるんだお前は！」

東条さんがお帰りになって数分後。詳しい尋問（！）のために、応接室から室長室に移動させられた。向かいのソファに座った鷹臣君と鏡花さんが呆れ気味にため息をつく。

ため息をつきたいのは私だって！　つてことは今は言わないでおく。

それにしても靴を頼りに私を捜してるつて……ほんと一体何の厄日だ。

「洗いざらい話してもらどうぞ、麗」

「そうね、さっきの変装の訳もちゃんと説明してね？」

うひい！

ウィッグと伊達眼鏡を取った私は、声にならない悲鳴をあげた。

自分ですらよくわからない状況のまま、とりあえず説明できることを一通り話した。

徹夜明けでくたくただった三日前に電車でスリを捕まえたこと、犯人のおばさんに突き飛ばされて、気づいたらあの東条さんの家で寝かされていた（正しくは抱きしめられていた）こと。あ、着替えさせられてたつてことも言ったけど、どこまでとはさすがに恥ずかしすぎて口でできなかつた。そうして話を終えると、私たちの間に何とも言えない沈黙が流れる。

「……それで？　お前は駅でぶっ倒れておそらく介抱してくれたであろう東条白夜氏にお礼も告げず、靴を片方置いて逃げてきたと？　しかも律儀に靴を返すために忙しい時間を割いてまで市川玲捜しをしている東条氏に直接会つたにもかかわらず、詫びの一つもなしとは……いい度胸だな、麗？」

うっ！　そんな言い方をされたら、私がめっちゃくちゃ礼儀知らずな人みたいじゃないか！

……見方を変えればそうなんだけど。

「でもあそこで市川玲ですつて名乗るわけにはいかないよね!?　だつて偽名で存在しない人なんだし！」

そうだよ。多分身元を知りたくてバッグを見たんだろうけど、あの時は一ノ瀬麗名義のものはカードも含めて一切持っていなかつたはず。携帯だつて普段からロックをしてるし、自分の登録名も暗号化していて、他の人が見てもわからないようにしている。自宅や弟の名前ですらイニシャルやあだ名に変えてあるし。

「で？　社員証があつたのはまずかつたが、他に何か身分がわかるもの、入れてなかつただろうな？」

社員証は後日郵送で送ることになつていた。担当者があの日出張でいなかつたので、直接返せなかつたんだ。もしさつさと渡せていたら……また違う展開になつていたかもしれない。

「大丈夫。確認したけど、名前が入っているのはそれだけだよ。偽名使つてる時にカードは持ち歩かないし、保険証とかも家に置いてあるし。携帯も大丈夫だし、後は自宅の鍵とかだけ……そんな

なの見ただけじゃ、どこの家のかなんてわかるわけないしね」

少し冷めてしまった紅茶を飲む。紅茶は利尿作用があるから、お客さんが来る前は飲まないようにしていたけど、今ならもういくら飲んで大丈夫。むしろ、この香りは心を落ち着かせてくれるから、今こそ飲むべきだ。

「それにしても……靴なんて捨てればいいのに。見た目通り優しくて律儀な方なのね。見ず知らずの相手を自宅で介抱するくらいだし」

鏡花さんが面白がるような笑みを浮かべた。

そもそも自宅じゃなくて、病院に連れて行ってくれていたら、こんなことにはならなかったんじゃない？ って思ったけど、保険証もなし、さらには偽名で病院に入院、なんてことになったらそれこそ厄介だ。ということは東条さんグッジョブ！ と言うべきなのか!? いや無理、それも無理だ。「そうだよ、靴なんて捨てちゃえばいいじゃん！」

「お前、あれだけの勢いで凝視ぎょうししていた奴がそれを言うか？」

……捨てられたら号泣したと思います、はい。

手に届くところに私の靴があるのに、戻ってこないもどかしさ。もういつそのこと東条さんに、「無事に市川玲さんにお返ししておきました」て、事後報告しちゃう!?

そんな策をあれこれ思い巡らしていたら、非情な鷹臣君が、落ち込んでいる私をさらに奈落ならくの底に突き落とす。

「麗。お前、そのまま東条氏の担当ね」

「……え？ 何で!？」

「自分の落とし前くらい自分でつけるのが筋だろうが。それにな、ちょうどタイミングがよかったんだよ」

机の引き出しから取り出した、クリアファイルに入った書類を渡される。これって依頼書？

「あの仕事が終わったらお前に回そうと思っていた次の案件だ。とある人物がな、その人を調べて欲しいんだと」

興信所がやるようなことか……まあ、私にもできそうなレベルだけど。

書類に記入されている人物名を見て、鷹臣君が言っていた「タイミングがよかった」の意味を理解した。一体何の偶然でしょうかね。そこには、先ほどまでここにいた東条白夜、その人の名が、ばつちりと記載されていた。

「青葉の大学時代の後輩らしいんだよ、その依頼者。んで、うちに来たんだがな。すげー偶然もあるもんだよなあ。まさか東条氏本人が現れるとは」

ニヤリ、と鷹臣君が人の悪い笑みを浮かべる。

やめて、やめてー！ それ以上は聞きたくない!!

「麗。東条氏の依頼を受けながら、こっちの案件も同時にこなして来い」

主に女性関係を知りたいとき。と告げられて、私は内心で悲鳴を上げた。

「はあ!? 何言ってるの鷹臣君！ そんなの無理に決まってるじゃない！」

「何言ってるやがる。下手に接触するよりも断然リスクが少ない。相手に悟られずに自然な形で東条

白夜の身边を調査できるんだ。楽に決まってるだろーが」

「そうかもしれないけど！ 私は!? 私のリスクはどうしてくれるのさあ!!」

バレるでしょーが、確実に!!

そもそも市川玲は存在しないのに、どうするのよ!

鷹臣君は長い脚を組み直して、私を見下ろしてきた。

「いや、麗。これはお前のためでもあるんだぞ。彼氏いない歴〓年齢を更新中で、ファーストキスも未経験のお前が、俺は従兄いとことして心配なんだ」

「え！ 麗、あんたファーストキスもまだなの!?」

「ついでに言うなら、初恋もまだだな」

「天然記念物よね、それって」

と続く鷹臣君と鏡花さんの会話を、私は頬を引きつらせながら聞いていた。

「で？ 一体なんで彼氏がずっといないの？ 別にあんた男性不信でも恐怖症でもないわよね？」

「鏡花さん……。それは黙っててもモテるお二人にはわからないですよ」

別に女子校育ちでもなければ、男性が苦手なわけでもない。普通に男友達はいるし、いいなって思った人だった。でもそれが恋か？ って聞かれたら、疑問符が浮かぶ。

この人しかいない！ 大好き！ 愛してる!! って気持ちに、未だになんかすることがない。告白されたこともないし。ああ、自分で言ってる悲しくなってきた……

「あんた、外国育ちのくせに何やってるのよ。枯かれた青春時代なんてもったい無いわよ。見た目は

普通に可愛いんだから、今まで寄ってきた男の一人や二人いたでしょう」

「そんな慰めはいりません……」

外交官である父の仕事の関係で、私は幼少の頃から世界各国を転々としていた。アメリカの大学に入ってから一人でアメリカに残ったけど。大学卒業後に日本へ戻り、今は弟と二人暮らし。両親は現在アフリカのどっかの国に赴任中だ。高校生になった弟は、日本で高校生活を送りたいからと、私と一緒に住み始めたんだよね。

別に人見知りでもなかったから、転校先でもそれなりに友達はできた。それなのに何でファーストキスすら未経験かって？ そんなの、チャンスがなかったとしか言いようがない。

「こいつはな、とにかく鈍感で、相手の好意に気づかないんだよ。ま、アプローチしてきた相手もはつきり言わなかったのはいけないんだけどな。このままじゃお前、一生独り身だぞ？」

知っていたけど、鷹臣君は時にいじめっ子で鬼畜ききゆうだ。

「そんな怖いこと言わないでよ！ いや、その時は鷹臣君にもらってもらうから」

「アホか。お前みたいなお子様が俺を満足させられるか」

可愛い従妹に対してその言い草……微妙に傷つくんですけど。

「なるほどね〜。東条氏は麗が男に慣れるにはちょうどいい相手ってわけね」  
慣れるって！

「まあな。あ、言っておくがな麗。世の中の男がみんなあのレベルだと思わないよ？ あれは規格外だからな。あそこまで揃っている男はそうそういない。人当たりがよさそうで穏やかな紳士、東条

白夜から、少しずつ男を知って慣れていけ」

「よかったわね、麗。日本で本物の紳士に出会う機会なんて滅多にないわよ？ 外国慣れしたあなたにはちよんどのいいじゃない。あ、でも本気になったら痛い目見ると思うから、あくまで他の男に目を向けるための練習ね」

そんな提案、もちろん聞き入れるわけにはいかない。だってあの人の穏やかそうな顔してるけど、絶対中身は紳士じゃないよ！

紳士が寝ている女の子の洋服を着替えさせて、あまつさえブラまで取るかー！

紳士なら、普通自分はソファで寝て、私にベッドを使わせてくれるんじゃないの？

「無理、絶対に無理……！ 勝手に着替えまでさせられてたんだよ！ そんな相手と平気な顔で向き合えない。第一、あの人に会うたび、あの格好で瑠璃ちゃん風の喋り方とか、ぶっちゃけめんどくさい！」

「着替えはお手伝いさんとかがしたんじゃない？」

「お前が勝手にあのキャラにしたんだろーが。ギャーギャー喚くな。自業自得だ」

二人にそれぞればつさりと切り捨てられて、がつくりとうな垂れた。これはもう決定事項だ。

鷹臣君、荒療治すぎる……！

「トイレ行つてくる……」

ひとまず気持ちを落ち着かせようと、私は席を立った。



「室長、よろしいんですか？」

麗がいなくなつた直後、鏡花が鷹臣に尋ねた。恋愛という意味では男に免疫のない麗を、見た目は、穏やかな紳士に近づけていいのか、と。

鷹臣はタバコに火をつけつつ、淡々と答える。

「このくらいしないと、あいつはずっとあのままだ。無意識に異性を避けている。疎いとか鈍いとかじゃない。恋の気配がすると本能で避ける。身についた習慣は、こういった荒療治でなけりや変えられないからな」

麗が何故そうなつたのか、理解できないわけでもない。特殊な環境下で育つたせいで、無意識に普通の人間と恋愛の意味で距離を置こうとしてしまうのだ。鷹臣は身内だからこそ、そのことをよくわかつていた。

「それは……室長の、家系的なものなせいですか？」

ためらいがちに鏡花が再び尋ねた。

「あいつに俺たち一族に伝わるこの力は、ほとんど遺伝してねーよ。ただ、ほんの少し小さなものを動かすことができたり、遠い未来の断片を予知夢で見たりつてことはあるけどな。まあそんなのどつちも些細な能力で、まるで役に立たない。へっほこ超能力者だ」

——古紫家は、古くから特殊な能力を持った家系だ。一般的に超能力として知られている念動力、千里眼、読心術などが使える。直系の鷹臣は不思議なその力を強く受け継いでいるが、一族全員が力を持っているわけではない。麗はほんの少ししか受け継いでいないし、麗の弟には全く継承されていない。

「力は弱くても、本能的に危険を察知する野生の勘は鋭いんだよな、あいつは。だから大丈夫だろう。あのくらい癖のある男といれば、他の男になんて、早々に慣れるしな。女扱いされりゃ少しは恋愛レベルも上がるだろうし、兄代わりの俺も安心できる」

言葉では麗を気遣っているようだが、ニヤリと笑ったその顔は、思いつき面白がっている。

「せいぜい楽しませてもらうぜ、麗。期待してるからな」

この鬼畜男と血が繋がっている麗に、鏡花は少し同情した。

### 〈質問〉

十二月三十一日。今年も残りあと一日を切った。

事務所は名目上は年中無休なんだけど、緊急の依頼がない限り年末年始はちゃんとお休みにしてくれる。そういったところは鷹臣君が配慮してくれていて、それはとってもありがたい。家庭持ちの百瀬さんとか青葉さんに見たら、お正月を家族で過ごせるのは嬉しいだろう。十二月三十一

日から一月六日まで連続でお休みで、私も久々の連休に浮き足立っていた。

……立っていた。そう、昨日までは。

昨日の帰り、鬼室長の鷹臣君が、余計な一言を告げなければ、私は休み中にたつぷりと英気を養って、年明けにバリバリ働くことができたはずなのに。

——私は今、窮地に立たされている。

仕事納めにとデスク回りを片付けていた私に、鷹臣君が爆弾を落としたのだ。

「麗、お前、明日の昼に東条セキュリティに行つて来い」

時間があるかと聞くわけでもなく、命令形ですか！

拒否権は!? と訴えたが、すでにアポイントを取ったとか。仕事の早い鷹臣君に、「明日できることは今しない」は通じない。まあ、早い、正確、が売りのうちの事務所に、この言葉が存在しないのは承知していますけど。

でも、本来なら三十一日はすでにお休みのはずなのに——予定が入っていたらどうするつもりだったのよ！ と詰め寄ったら、鷹臣君は私を鼻でせせら笑った。

「今年は叔母さんのところには行かないんだろ？ どーせ弟と家でまったりごろごろしてるだけだろーが。なら動け、外に出ろ。家に引きこもってたらデブるぞ」

なんて、乙女に禁句を……！

冬は太るから確かに気をつけないとまずいけど！

思わず一発殴りたくなった。が、もちろん、実行する勇氣はない。

東条セキュリティというのは、依頼主である東条白夜氏の会社だ。政府関係のセキュリティにも携わっているとかで、その業界では世界のトップ三に入っているらしい。年々業績も伸び続けているそうだ。

この話は、ハッキングやクラッキングを得意とする赤坂さんに教えてもらった。つて、赤坂さんは何でそんな特技を持っているのか。うちの事務所のメンバーは本当に謎だらけだ。

そして約束の時間の三十分前、私は近くのカフェで深呼吸を繰り返していた。不自然に吸ってーはいてーと続けている私は、端から見ればめちやくちや怪しいと思うけど、どうか見逃して欲しい。オフィスの前に辿り着いた瞬間、あまりに立派なビルに思わず回れ右をしてしまったのだ。

こんなところに二十八歳の若さで社長に就任したなんて、東条さんには尊敬よりも恐れを感じる。こんなやり手な若社長が、何故うちみたいな何でも屋に搜索依頼をしてきたのか、未だに不明だ。そんなの、部下にでも頼めばいいんじゃないの？

世界に名立たる東条グループのオフィスに足を踏み入れるというだけで、服装にもかなり気が遣った。この前よりも落ち着いたダークブラウンのウィッグ（これは外せない！）は、少し上品に見える緩い巻き毛。前髪を横に流して、ナチュラルに見える付け睫毛をつけた。若干ギャル度が下がったけど、それでも若さを出すために、唇はピンクの潤いたつぷりグロスでふるふるに。

伊達眼鏡は黒ぶぢじゃなくて、ちよつとオシャレフレームのダークレッド。茶色に近い赤で、少しシックに見えるはずだ。

コートは派手になり過ぎないように白にした。本来ならスーツ着用だろうけど、この前の印象か

ら大きく外れることはしたくない。だから、会社に着て行ってもおかしくないような赤のチェックのワンピースに黒いカーディガン、それと黒のロングブーツにした。

ちなみに今日の設定年齢は、瑠璃ちゃんと同じ二十二歳。ギャルではないけれどイマドキの若い女の子で、かつそこそこ品も保てるようにと、一時間かけて考えたコーデだ。これだけで気力を使い果たした。

「もう帰りたい……」

心を落ち着かせるために注文したカモミールティーを飲み干して、私はぼつりと呟いた。



「こちらが社長室です」

案内してくれたのは東条さんの秘書である司馬さん、推定年齢三十五歳。落ち着いた黒のスーツにきつちりセットされた髪、そして凛々しい眉毛が素敵な、硬派なお兄さんだ。精悍な顔つきは、東条さんと系統は違うものの、こちらもまたかつこいい。低い声と逞しい体格が、大人の男性って感じ。

司馬さんは扉をノックすると、私に先に部屋に入るよう促した。社長室は最上階ではなく、ビルの途中階の十階にあった。部屋に入ると、そこにはふかふかのカーペットと落ち着いた雰囲気の家具、そして広い執務机がおかれていた。

奥のソファに案内されたところで、隣室から東条さんが顔を出した。

「お呼び立てして申し訳ありません」

柔和な笑顔で丁寧あてまつに挨拶されて、私は慌ててお辞儀をした。

「いゝえ。こちらこそ、少し遅れてしまつて、申し訳ありません。初めて来た場所なので、迷つてしまいました。立派なビルですね〜!」

遅れたと言つても、ほんの二分だけどね!

カフェでぐだぐだ悩んだあと、ビルの前に再び戻り、建物に入る覚悟を決めるのに五分かかった。それから受付の人の案内で秘書の司馬さんにお会いして、社長室に辿り着いたのが十二時二分。それでも会社のトップは分刻みで動いているだろうから、二分のロスは大きいと思う。

にもかかわらず、東条さんは穏やかな微笑ほほえみを崩さなかった。

「ありがとうございます」

にこり、と笑つた彼に対して、私は引きつった笑顔を返す。

破壊力が、ヤバイ……!

直視しないように気をつけていたのに、うっかり見てしまった。

改めて真正面から見ると東条さんは、本当にかっこいい。さらさらで艶つややかな黒髪、きれいな二重ふたえに高い鼻梁びりょう。そこに少し薄めの唇がバランスよく配置されている。その微笑に女子社員は骨抜きだろ。声は耳に心地いい中低音で、ゆつたりとしていてどこか甘さがある。身長も一八〇センチは超えているに違いない。仕立てのいいスーツが実によく似合っている。

……なんだろう。顔がよくて背が高く社長で、これで性格もよかつたら胡散臭うさんくさすぎる。神様は不公平じゃない? だなんて思つてしまうよ。

ソファに座り、バッグを横に置くと、司馬さんが紅茶を出してくれた。しかも、私の好きなアーモンドグレイ……って、珍しいな。普通は無難にお茶かコーヒーなのに。さすが天下の東条グループ、つてどころか。でもまあ、コーヒーが苦手な私にとってはありがたいことなので、遠慮なく頂く。

「東条さん、本日は経過報告のために呼ばれたのでしょうか?」

瑠璃ちゃん言葉続行中。痛い、痛すぎると心の中で突っ込みつつ、何とかほんわか笑顔で心がけて、今日の目的を尋ねた。

「そうですね。でもまずは、麗さん。お昼がまだでしたら一緒にしませんか? 翠六庵すいろうあんのお弁当を注文したので、よろしかったら召し上がってください」

何ですと! 翠六庵!?

この辺では有名な、高級和食屋さんだ。そこのお弁当は、一つ三千円もする。それをオーダーしてくれてたなんて、マジですか!

お弁当に心を奪われた私は気づかなかつた。

「一ノ瀬さん」ではなく、「麗さん」と呼ばれたことに。

そしてそのことに気づいた司馬さんが、怪訝けげんそうな顔で社長を見ていたことを。

私はその時、思いっきり見逃していたのだった。



翠六庵のお弁当は大変美味でした。

向かい合わせでお弁当なんて食べられるか！なんて最初は思っていたけど、食べ始めたらおいしいご飯の方に意識が集中して、目の前の美形なんて目に入らなかつた。

いやいや、依頼主に対してその態度は正直失礼すぎるけど。

食事中の談笑で、私はいつの間にか「麗さん」と呼ばれていることに気づいた。

あれ？ いつから「一ノ瀬さん」じゃなくなつてたんだっけ？ なんて一瞬間に思ったけれども、外国育ちなためか、全く違和感がない。むしろ苗字で呼ばれる方が戸惑ったりする。向こうが麗さんと呼びたいなら好きにすればいいかあゝなんて、のん気なことを考えながらおいしいお刺身をつまんでいた。

そして食事が半分ほど進んだところで、本来の目的を思い出した。

そうだよ、私つてば自分の靴のことばかり気になつてたけど、もう一つ任せられていた案件があつたじゃないか！ 目の前の微笑み紳士について調べて欲しいというやつ。

確か、東条さんの恋愛事情を中心に調べて欲しいとか。今お付き合いされている人とか、過去に付き合っていた人とか……。なんでそんなこと気になるんだらうつて思つたら、何と依頼主の妹さ

んが東条さんに惚れこんでいるのだとか。それで、いわゆるシスコンの兄が、妹の想い人のことを徹底的に知りたいらしいのだ。

おいおい、お兄さん。二十歳過ぎた妹さんに対してここまでやる？ つて思っちゃうけど、まあシスコンなら仕方がないか。私だつて弟がいるし、もし弟が片想いしているのなら、その相手のことはそれなりに気になるもんね。

でもうちを使つてまで調べたいとは思わないけど。

さて、お腹も大体落ち着いてきたし、さくつと仕事をこなしてみますか。

ポイントは「ごく自然にね！」つてことで。多分瑠璃ちゃんならちよつと天然系の直球を使って、「ところで彼女さんとかつて、いるんですかあゝ？」なんて可愛く聞くんだらうけど。自分がそれをやるところを想像したら、軽く気持ち悪くなつた。

いきなり彼女の話はまずいな。じゃあどうやって攻めるか……

よし。無難だけど不自然じゃない方法で、趣味とか聞きながら恋愛事情に持つていこう！ 司馬さんが淹れてくれたお茶で喉を潤して、優雅に食事中的東条さんに微笑みかけた。

「東条さんつて、とても上品にお食事されますよね〜」

「そうですか？ ありがとうございます」

「食事中なのに麗しいな、おい。」

初めは事実を述べて相手を褒める。うん、さわりはオツケー。そして少しずつ核心に迫ろう。

「お料理とかはされるんですか〜？」

多分しないだろうねえ。自分で作る必要が絶対ないよ、この手の人は。今はあのマンションでひとり暮らしっぱいけど、きつとご実家は豪邸で、メイドさんとかシェフとかが何人もいるんだよ。そんな人がまともに食事を作れるはずがない。なんて失礼なことを思っていたら、意外な答えが返ってきた。

「はい、料理はしますよ。ひとり暮らしですので」  
え、するの!?

まあ、どっちでもいいか。最終地点は、料理の話より彼女のことなんだから。

「そうなんですか。彼女さんに作ってもらったりはしないんですか?」

そこでYesかNoかだ。さあ、どっち!?

「そうですね。私がいつでもお作りしますよ。どうぞ遠慮なく仰ってくださいね」

……にっこりと微笑んだ東条さんは、YesともNoとも言わなかった。

あれ? これってどっちなの?

ってゆーか、何で私に話しかけてるっぽいんだろう。彼女の話を聞いていたはずなんだけど。

これ以上この話を続けるのは何となく危険だ。そう本能的で察知した私は、曖昧に笑っておくことにした。

違う角度から探ってみるかと思っていた矢先に、今度は東条さんが話しかけてきた。

「麗さんも、お箸の使い方が今時珍しいくらいきれいですね」

「へ? あ、ありがとうございます」

そんなことで褒められると思っていなかったので、少しどきつとした。

「麗さんのご両親がしっかりされた方なのですね」

「え、ええ。お箸をちゃんと使えなきゃ日本人として恥ずかしいと言われまして。海外生活が長かったので、日本の文化はきっちり教育されました」

「そうなんですか。海外といいますが、どちらにいらっしやったのですか?」

「父が外交官なので、いろいろ行きましたが、ヨーロッパとアメリカが多かったですね。大学卒業まではアメリカの東海岸にいましたけど。両親は今がアフリカに赴任しています」

「それでは麗さんは外国語も堪能なんですか?」

「いえ、それほどでも……英語は話せますが、あとはスペイン語が少しくらいですて」  
おかしい。

何故私が質問をされる立場になっているのだ。しかもどうして本当の自分のことを喋っちゃってるの!? この東条さんの柔らかい空気に癒されちゃってるのかしら。それはまずい、気が緩んでいるのかも。こちら辺でやめておかないと、余計なことまで言ってしまういそうだ。

何とか主導権を取り戻さないと……!

「あ、あの! 私も、東条さんに、お尋ねしたいことがありますて」

少々強引だったかもしれないけれど、東条さんは嫌な顔ひとつせず、微笑を浮かべたまま「どうぞ」と頷いた。

え、いいの? 改めて質問する権利を与えられると、迷うんですけど!

どうしよう。依頼主から頼まれている質問を片っ端から聞いてみる？ でもそれじゃ不自然か。ご趣味は？ なんてお見合いみたいだし、仕事の話は特に頼まれていないし。

やっぱりここは直球で恋愛事情に踏み込んでみる！

にこにこしている東条さんに不審がられないように迷いを捨てて質問しようとしたとき、タイムラグよく(?) ノックの音が響いた。

「失礼します。お茶のおかわりをお持ちしました」

司馬さんが新しいお茶を持ってきたので、質問はできなかった。

すっかりデザートまで用意してくれていた東条さんにお礼を言った後、市川玲についての経過報告に入る。

「何かわかりましたか？」

食後のコーヒーを飲みながら、東条さんが尋ねてくる。私は、困惑と残念の、両方の感情を混ぜたような表情を浮かべた。

散々考えたけど、結局一つしかないアイデアが出なかった。

すなわち、市川玲は家庭の事情ですでに国外に移住している、と。ご両親が海外にいて、仕事を辞めたのもそのせいってことになっておけばいいだろう。まあ、半分近くは本当だしね！ 私の両親が海外にいるのは事実だし。それで肝心の靴は彼女の知人から住所を聞きだして送っておきました〜とでも言っておけば、十分だろう！

——この時は、そう思っていた。

「申し訳ありません〜東条さん。実は市川玲さんは、家庭の事情で海外に移られたそうでした〜」

「そうなんですか。どちらに行かれたのでしょうか？」

「それが、アメリカのロサンゼルスです〜。詳しい事情は彼女の親しい友人にもわからないそうなんです〜」

東海岸は私が大学を出るまで住んでいたせいとか、なんとなく使いづらい。なのであまり知らない西海岸にあるロサンゼルスってことにしておく。

後は靴は送っておいたと言えば完璧……！！

内心勝利の笑みを浮かべたところで、驚きの発言が――

「なるほど。わかりました。それでは、行きましようか」

「……へ？」

行く？ 行ってくつて、どこに？

ぽかん、と口を開けた私をよそに、東条さんは司馬さんにスケジュールの確認をする。そして、司馬さんがてきぱきとノートパソコンで何かやり始めてから僅か数分後、東条さんは画面を確認して、彼にお礼を言った。

「それでは今夜の便で参りましょう」

私に向き直ってそう告げた東条さんは、その場でプリントアウトされた紙を一枚手渡してきた。受け取った紙は、ファーストクラスのチケット。それが意味するのは……って、ちよつと待った

あ!!

「ちょー！ ちょっと待ってくださいっ！ まさか本気……ですかあ？」  
危ない、半分まで素が出ちゃった！ 慌てて瑠璃ちゃん言葉に直す。

麗しい微笑を浮かべた男は「はい、本気です」とあっさり肯定した。

「でもですねー、私は室長の許可がないと、勝手な行動はできないんです」

そう苦し紛れに伝えてみると、東条さんは少し考える素振りを見せた。

諦める、諦めるー！ と念を送ったのに、どうしよう。この人には全く効かない気がする！

頼みの綱は鷹臣君だけだ……！

けれど鬼で非情で鬼畜な鷹臣君は、見事に私の期待を裏切ってくれた。

その場で室長に電話をかけた東条さんは、笑顔でお礼を告げて電話を切ると、私にっこりと微笑みかけたのだ。

「それでは麗さん。今夜事務所までお迎えにあげります。待っていてくださいね？」

私は涙目になるのを必死に堪えて、弱々しく頷くのが精一杯だった。

## 第二章 波乱の出張

〈年末〉

「ひびき〜き〜!!」

自宅の玄関のドアを勢いよく開けた私は、猪のごとく猛ダッシュして弟を捜した。

両親が昔住んでいた二戸建ての家に、私は今、弟と二人で住んでいる。そこそこ敷地面積があるため二人で住むには余裕の広さだが、掃除が面倒だったりする。不規則な生活の私と違い、弟は真面目な高校一年生。まさしくA型！ と言えるようなきつちりとした性格で、汚し魔のお姉ちゃんは大変助かっております。

弟の自室に辿り着いた私は、ノックもせず扉を開いた。

「響ー！ お姉ちゃんを助けてー!!」

いきなりこの登場の仕方は我ながらどうかと思う。でもそんな私に対し、まだ十六歳なのに私よりはるかに落ち着いている弟は、困り顔で椅子から立ちあがり、「麗ちゃん、お帰り」と笑った。

「どうしたの？ 麗ちゃん。また鷹臣君に苛められたの？」

……九歳年下の弟に、従兄に苛められたのかと心配される姉ってどうなんだろう。何だか姉の威厳が全くないように思える。

でもそんなことを気にしている心の余裕はない。いつも通りに抱きついて喚いて癒してもらおう。って、ダメ姉だな、私。

落ち着いた外見の真面目な弟は、面倒見がよくて几帳面で、本当にいい子に育った。学校ではクラス委員長もしているらしい。私と違って一族の特徴である漆黒の髪を受け継いでいて、眼鏡をかけている。

机の上には教科書とノートが広がってあった。冬休みの宿題でもしていたのだろう。最終日まで溜めておくタイプの私と違い、弟はきっちり計画的にこつこつ進めるタイプなのだ。同じ遺伝子を持つているはずなのに、こうも違うなんて……お姉ちゃんもちよつとは見習わなくては。

そんなことを考えながら、本来の目的を思い出した。そしてすっかり目線が私より上になってしまった弟を見上げて、懇願する。

「響、鷹臣君に電話して！」

怪訝そうな顔で響は首を傾げる。顔に「何で？」と書いてあった。

「あの鬼畜で非情な室長様は、私からの電話には出やしないのよ！ 電源切ってるか、着信拒否にしているか。それしかありえない！」

「いや、着信拒否までではないと思うけど。多分あれじゃない？ 今移動中なんじゃないの？ ほら、鷹臣君、新年の挨拶をかねて、京都のおばあちゃん家に行くんでしょ。年越しは毎年あつちで

やるじゃない」

ああ！ そっか、それを忘れていた。

祖母の家は京都にある。毎年この時期になると、古紫家の一族が勢ぞろいする堅苦しくい集まりがあるのだ。ただ、うちはもう一ノ瀬姓を名乗っているから、出席してもしなくてもいい。それに両親が海外にいる関係上、行くとしても響と二人なので、そういった正式な場には少し顔を出しづらかったりする。とはいえ、時間を見つけて新年の挨拶には伺うつもりだ。

「何てタイミングの悪い……！ 確信犯？ 確信犯なの!？」

弟の肩を揺さぶっていたら、ずり落ちた眼鏡を上げて響が「落ち着いて」と宥めてきた。

「何があつたの、麗ちゃん。どうしたの？」

少し心配そうに顔を覗きこんできた弟の優しさに心が救われる。いい子に育ってお姉ちゃんは嬉しい！

「ごめんね、響……突然だけど、お姉ちゃん今夜からアメリカに飛びます」

「は？」

「いや、正しくは、連行されます。もう、鷹臣君が駄目って言うてくれればこんな目に遭わずに済んだのに！」

「ごめん、意味わかんないんだけど。今夜の便でアメリカのどこに行くの？ 出張？」

「出張かと言われれば一応仕事だからそうかも？ 場所はサンフランシスコとロスかな」

市川玲なんていないんだから、捜しようがないし、行くだけ無駄なんだけど……

もう、なんでこんな展開になっちゃったんだろう。

「ずいぶん急だね。荷造りこれからでしょ？ 早くした方がいいんじゃないの？」

響に言われて時間を確認したら、いつの間にか三時になるところだった。確かにそろそろ準備しないとい！

「でも！ ほら、やっぱり響ひとりになっちゃうから、弟が心配だから行けないって鷹臣君に伝えて……」

「何言ってるの。仕事ならちゃんと行かなきゃ。それに僕のことなら心配しなくても、ひとりでちゃんとできるから大丈夫だよ」

すっかりした弟を持って嬉しいはずなのに、何だろう。今最後の頼みの綱をブツリ切られたような気がした。

「でも、新年をひとりで迎えるのは寂しいでしょ？ お正月もひとりなんだよ!？」

寂しいって言えー！ って思いは伝わることなく。話の途中で、突然響の携帯が鳴った。

「——うん、わかった。ありがとう、そうさせてもらうよ」

電話の相手にそう伝えて響が携帯を切る。

何だか雲行きが怪しいようにしか、私には思えないんだけど？

「誰？ 女の子？」

でもって、もしかして彼女!？」

もう高校生なんだから彼女くらいいてもおかしくないけど、私より早く恋人ができるのは、姉と

しての威厳が……!!

「うん。クラスメイトだけど、ちょうどよかった。お正月、御節<sup>おせち</sup>食べに来ないかって誘われたんだ。どうやらご両親が旅行中で、お兄さんと近所の同級生と一緒に食べるんだって。僕もそっちに参加するから、心配しなくて大丈夫だよ」

——だから心置きなくアメリカに行つて来てね。

笑顔で手を振られて、私は内心思いつきがつくりした。でもここで落ち込んだ様子を見せたら逆に何で行きたくないのか響に説明を求められそうだ。そんな気力はないし、弟に知られるのはちよつと困る。というか、恥ずかしい。一体なにをどう説明しろっていうんだ。

結局私は、元氣なく一言「ありがとう……」と告げて、自室へと戻った。

ああーもう！

女は度胸と根性！

って誰かが言ってたんだっけ!？」

遠い昔、おそらく母に言われたであろう格言なのかなんなのかわからない言葉を思い出して、八つ当たり気味にキャリーバッグを押入れから引っ張り出す。そして私は泣く泣く荷造りを始めた。

約束の時間まで、三時間を切っていた。